

⇒ 研究ノート ⇐

集団移転から30年後のソーシャル・キャピタル（加筆稿）

— 新潟県三面集落を事例に —

澤 村 明

キーワード ソーシャル・キャピタル，集団移転，マタギ，コミュニティ

はじめに¹

本稿は、澤村&杉原&北村&渡邊 [2012]「集団移転から30年後のソーシャル・キャピタルー新潟県三面集落を事例にー」にその後の知見等を修正加筆したものであり、前稿のインタビュー調査部分は変わっていない。

新潟県岩船郡朝日村奥三面集落は²、マタギの里と呼ばれ³、宮本常一も言及するなど民俗学では知られる集落であった⁴。1980年にダム建設のため閉村となるさいの記録を民族文化映像研究所（以下、民映研）が作成したことも、広く知られるようになった理由の一つであろう。平家落人伝説から始まる村の伝承、狩猟や山菜・キノコ収穫といった山間集落の民俗は、後述する田口洋美 [2001] などに詳細に記録されている。本稿は、語り尽くされた感のある「山の暮らし」を再度取り上げようというのではなく、それらでは明らかにされていない事実と、31戸の集団移転から約30年を経て、住民意識や付き合いの変化などをインタビューにより調べたものである。

旧三面集落は古くからマタギの里として民俗学分野で知られ、民映研の映画にもなったため有名になったが、旧朝日村職員で朝日連峰に詳しい遠山実によれば、旧三面から北西へ約15km離れた高根集落（図1）と「集落の特徴はだいたい同じ」だったという⁵。すなわち林業を主とし、ゼンマイなどの採取が盛んで、熊などの狩猟も時々行っていたとのことであった。ま

¹ 本稿は、科研費基盤(C) 23500903「中山間地域・離島における居住の継続を支える社会関係資本の実態把握調査」(代表：澤村明)の成果の一部である。

² 現在は広域合併により村上市となっている。「奥三面」とは集団移転の原因となったダムの名称以降に用いられた通称であり、地名としては単に「三面」である。また村上市松山地区への移転後の新たな地区名も「三面」としている。そのため以下、本稿では移転前の山間集落を「旧三面」とし、移転後の平地集落を「新三面」と表記する。

³ たとえば椿宏治 [1968] では「越後のマタギ」として8集落紹介されている中の筆頭が三面である。

⁴ 宮本常一 [2011] p.29。

⁵ 遠山実による(2013年6月9日、新潟大学新潟駅南キャンパスにて)。なお同人は、20年に及ぶ磐梯朝日国立公園自然保護指導員の業績により、2011年に環境大臣表彰を受けている。高根集落については、参照、鈴木信之 [2011]。

た山形県小国町にも「マタギの郷交流館」という公の施設があり、「全国でも有数のマタギの里として古くからマタギ文化を伝承している」としており⁶、少なくとも朝日連峰周辺で熊などの狩猟を行っていた集落は旧三面だけではない。椿宏治 [1968] で「越後のマタギ」として紹介されている8集落のうち、旧三面をはじめ五つが朝日連峰周縁の集落である。本調査での見分には、おそらく新潟以北の東北地方に広く存在する「マタギの里」といわれる中山間地域集落に共通した部分があるろう。

調査の目的は、集落の集団移転によってソーシャル・キャピタルの変化が観察できるかの確認である。もとよりコミュニティには地理的側面と人間関係的側面があり、集団移転はその地理的側面のみを変化させようという行為である。集団移転から30年、ほぼ一世代を経た集落がどう変化しているかを見ることで、東日本大震災被災地をはじめ、各地の中山間地域集落が検討するであろう集団移転への参考としたい。

1. 先行文献について

旧三面に関する文献は、学術的なものとしては遺跡調査に伴う考古学関係のものが多い。その他のアカデミックなものは、多くが地方の小学会のもので入手しづらい。古いものから、人類学・民族学の宮島幹之介 [1896]、椿宏治他 [1958]、椿宏治 [1968] などがデジタル化されていて閲覧容易である。また小林存が1906年に訪れた記録の現代文訳として小林存（曾我広見訳）[1990] があり、明治末の状況が簡単に描かれている。

一般書としては、田口洋美 [2001] が必読である。ダム建設に伴う閉村時に、民映研が記録作成したさいの、4年にわたるフィールドワークの結果であり、本稿でも大きく依拠している。民映研の映画は閉村時と、その10年後のインタビュー主体のもの2本があり、それぞれシナリオ主体の記録集が出版されている（民映研 [1984, 1996]）。

近年の刊行物としては、小池&伊藤 [2010] が有用である。これは閉村時に副区長であった小池善茂が1940年から1945年頃の暮らしを語ったものの聞き書きである。内容は主として第2次大戦中の山の暮らしであり、本稿の趣旨とは外れるが、巻末に詳細な文献リストが載せられており、上述の各文献も本書から知ったものである。また石川徹也 [2011] は山形・新潟両県に広がる朝日連峰の自然破壊と保護をテーマにした書籍であるが、三面の移転に紙幅を割き、さらに移転後の生活についてのヒアリングも1994年、2006年の2回、行なっている。

⁶ 小国町「マタギの郷交流館」サイト、
<http://www.town.oguni.yamagata.jp/guide/facilities/culture/matagi.html>。2013年11月22日閲覧。

2. 旧三面の概要

旧三面集落は地理的には、新潟県北部の三面川上流に位置し、もっとも近い隣の集落まで約20kmほど離れ、1973年まで車両通行可能な道路が達していないという孤立集落であった（図1）。1906（明治39）年に旧三面集落を訪れた小林存によれば、下流の岩崩集落から旧三面までの間は道なき道を、マムシや山蛭に悩まされながら進み、最後は三面川を独木舟で渡ったという⁷。この隔絶した山間の小盆地に集落が営まれたきっかけは不明であるが、ダム建設に先立っての考古調査によれば、縄文時代から古墳時代の遺跡が発見されており、後述するように採集と狩猟という面では人間の居住に適した環境であったようだ。



図1 三面関係地図（国土情報ポータルより作成。岩崩，入折戸は隣接集落）

居住は古墳時代で一旦途絶える。現代に続く旧三面集落の発祥は、伝説としては平家落人によることになっている。椿宏治他〔1958〕では「囲りをズーズー弁に囲まれていながら、この発音は頗る中央的、標準音的である。これはこの村の祖先が中央の地方から流れて来た事を示す」とあるが、本稿でこの後引用する数々の証言は、「ズーズー弁」と変わらない印象を受け

⁷ 小林存〔1990〕pp.16-27。

る⁸。史料で見る限り、初見は1597（慶長2）年の米沢藩の「瀬波郡絵図」とされている⁹。さらにさかのぼる伝承もあり、どうやら16世紀には集落として存在していたらしい。明治期には31戸および寺院の集落となっており、その後、1980年の集団離村時には42戸150人となっていた。ただし戸数の増加は単純なものではなく、第2次世界大戦前までは断絶と分家とで10戸ほどが入れ替わりながら約30戸で推移しているようだ。「山にも限りがあるもんだし、家を28軒以上増やしてはなんねえっていったもんだぜー」¹⁰という言い伝えがあるところから、そのぐらいが山中の自給自足生活の許容人口であったのだろう。

集落は小池、伊藤、高橋の三つの姓で構成される。伝承によれば小池氏が最初に到達し、後から近隣に到達した2氏もやがて集まって集落を形成したという¹¹。そのためか、姓としては小池が最も多数である。それぞれ本家があり、そこから分家が派生したということになっているが、この本家と分家という概念は混乱が見られ、今回のインタビューで本分家を言明した12戸のうち5人が本家と名乗り、どうやら第2次大戦前後に戸数が増加した際に分家ではないというニュアンスであったようだ¹²。すなわち、土地の所有と、入会地の利用権、具体的には狩猟のワナ設置、釣り場、山菜等採取の割当について、権利を持つのが「本家」という感覚であるようだ。

主にあの、終戦になってからの分家が多いから、うん。ですから、そういう衆は自分の畑とか田んぼっていうのはまず、ほとんど持ってねえやんさ。(Y.K., 男, 1932年生)

どっか満州で暮らすどが何かで、出で行ったけども、それこそ、戦争に負けだもんでこっち、あれして分家として前のうちに建てました。(Sa.K., 女, 1935年生)

1973年に車両通行可能な林道が通るまでは、徒歩で集落外と通交していた。新潟県内で川を下って村上方面へ出るルートと、山道を経て山形県小国町へ出るルートがあった。買い回り品は当然ながら、塩などの調達には徒歩でどちらかへ買い出しに出いたのであり、たとえば村上までは道のりで約40kmあるため、途中の集落に宿泊していたという。旅館等ではなく、ヤドと呼ぶ知り合いの家に泊まっていたそうで、そのヤドとは血縁等でもなく、「昔からの知り合い」という話であった¹³。また小中学校の分校が集落内に設置されていたが、高校は村上市になるた

⁸ 調査補助者の一人は山形県出身で、言葉が似ていると感じたという。樫宏治他 [1958] でも交流と教育によって急速に変化しているとしている。

⁹ 田口洋美 [2001] p.189。

¹⁰ 田口洋美 [2001] p.173。1906年当時は、28戸、人口125人、学校寺院各1であったという（小林存 [1990], p.3147）。

¹¹ 小林存 [1990] は異なる記述であり、伊藤、高橋の2家は小池氏の臣下であったという（小林存 [1990], p.31）。

¹² 1906年時点で高橋家はどこが本家か判らなくなっていたという（小林存 [1990], p.32）。

¹³ 逆にヤドの人々が旧三面へ山菜採りや山歩きのために訪れて泊まることもあったという。小林存も帰路に岩崩から所用で旧三面に来て帰る女性二人と同行している（小林存 [1990], p.54）。

め、高校生は村上市内に下宿した。冬期は交通が途絶するため、急病人など緊急事態が発生した場合はヘリコプターの出勤もあったという。

集落での暮らしは、先行文献に詳しく記述されている。基本的には平均4反（約4,000㎡）の水田、畑を所有し、山菜等の採集、カモシカ・熊などの狩猟、川魚釣り、といった自給自足的な生活である。水田面積は平地と比較しても狭くはないが、山間地であるため米の収量は低く、ヒエやアワなど雑穀栽培が大きな比重を占めたようだ。1960年代半ばまでは入会林で焼き畑（カノ）も行なわれていた。ちなみに1906年の資料としては、田17町歩（約17ha）、畑1町7反（約17,000㎡）、山林574町歩（約574ha）、原野2町6反（約26㎡）、他に焼畑があるとされ、収穫は米が玄米で200石（約36kl）、畑作が小豆4斗3升入20俵（約1,548l）、蕎麦60俵（約4,644l）、大豆30俵（約2,322l）、粟50俵（約3,870l）、馬鈴薯60俵（約4,644l）、麻、い草などとなっている¹⁴。

ただし、少なくとも第2次世界大戦後は営林署や製紙会社に雇用されての林業従事や、下流のダム建設など賃仕事に携わったという証言も多かった。冬期の出稼ぎも盛んであったようで、東京、名古屋、関西方面に行ったという証言があった。

エキスポ70でねえ。あん時も、ま、うちから出る時、女房と約束して、じゃあ万博行こうっていう約束で行ったもんだからね。その当時、いや金が無くて実行できなかったとこれはとても、というわけにもいかんしね。で俺、その時も社長にお願いして、社長、春までの給料社長預かってくれて、「なんで」っていうから「いやー、俺持ってるってみんな使ってしまうから、俺来る時女房と約束して、大阪の万博見学に行くって約束して来たから3月の末まで社長預かってくれて、いやいいよってことで、で、全部社長に給料預かってもらって、それでまあなんとかな。大阪から京都から女房と二人で楽しい旅行したことも、出稼ぎのひとつの思い出ですなあ。(K.I., 男, 1940年生)

後述のように大正期からゼンマイが現金収入になるようになったことや、賃仕事の発生が、30戸から40戸への分家の増加要因であるとも聞いた。

3. 移転の経緯

1967年8月に新潟県の北部と山形県を中心に集中豪雨が発生した。羽越水害または羽越豪雨と呼ばれ、死者・行方不明者が100人を超える事態となった。そのため新潟県では県北部の治水対策の一環として、三面川に新たなダムを建設する計画を立てる。三面川には1953年に三面ダムが建設されていたが（旧三面の下流に位置する）¹⁵、その上流、旧三面集落から約2km下流に

¹⁴ 小林存 [1990], p.47。

¹⁵ この三面ダムの湖面を朝日村が村営で渡し船を通したため、村上方面への交通の便が良くなったという。

新たに奥三面ダムを造ろうという案が1970年に発表される。水没することになる旧三面集落は当初は反対を表明していたが、1972年頃から集団移転と補償という方向に妥協していく¹⁶。

結果、1980年に閉村となり、42戸のうち31戸が村上市松山地区に「三面」として集団移転する。閉村以前に個別に離村した家もあり、また山形県小国町や新潟県豊栄市¹⁷などへ、主として子供の就職先を頼っての移転もあった。

移転候補地はなかなか決まらず、朝日村内など5カ所ほどを見て回って村上市の市街中心部から2kmほど離れた松山地区を選んだという。新たに造成した土地で、既存家屋等は少なく、ほぼ三面の家だけで1地区を形成している。住宅区画は100坪（約330㎡）、200坪（約660㎡）、300坪（約1,000㎡）の3タイプで、それぞれ希望を出してクジ引きで居住区画を決めたとのことである。旧三面には寺院と神社があったが寺院は維持できる見込みがなく、遺骨を村上市内の寺院に託し、鎮守社は新三面に移している。地名を三面としたいということから、造成された一角を松山地区から分離した形で三面という地区名にしている。

補償については十分なものではなかったという記述が多いが、石川徹也によると、一戸平均約1億円であり、集落の人々が一生かけても稼げない金額であったとされている¹⁸。閉村の1980年にせよ、移転が終了する1985年にせよ、たしかに小さな金額とはいいがたい。

また仕事の斡旋を県は約束していたものの、ほとんど成立せず、移転住民はそれぞれ個別に再就職先を探したようである。ただ、ダム建設に労務者として参加したり、移転後の遺跡発掘の作業員を務めた住民もいたとのことである¹⁹。

ま、それはあの一、ダム問題の交渉の時点では、職業斡旋してほしいということはひとつの条件には入れたんだけど。守られなかった、ま、結果的には守られなかったんだろうけども。要するに言葉ですからね。県も一生懸命努力したんだけどもできなかったっていう。あー、じゃあそれでは、そういうのであれば仕方ないわと思っても、結果としては守られなかったという言葉に、言葉としてはそうなりますからね。(K.I., 男, 1940年生)

4. 旧三面でのソーシャル・キャピタル

以下、2011年7月から12月にかけて移転先の新三面において住民にインタビューを行なった結果等から、主として旧地での人間関係、移転後にそれらが変化したかどうかを中心に、得られた知見について述べる。インタビューは31戸のうち合計17人から聞き取った。

山中の孤絶した集落での人間関係は全てが親戚であるかのような濃密なものであったらし

¹⁶ 民映研 [1984] p.13。

¹⁷ 合併により現在は新潟市北区。

¹⁸ 石川徹也 [2011], p.121。

¹⁹ 石川徹也 [2011], pp.110-126。

い。以下は他集落から嫁入りした女性が旧新の違いを語ったものである。

あれだね、こうして考えてみっど、こだけきて考えてみっど、山のつぎあいつてものは、人をやさしわね。みんな親切にしてくれる。こっちだば、まずさ、ぶらぐの人固まってるからあれだけど、ちょこっと離れたどぎ行ったってで、こどばも何もねがね。うん、でも、あっちはみんなこどば掛け合って、それこそほんとに、まず、なんてゆんだろ、親切って言うんだがおんって言うんだかね、そういうもんだ。(Sa.K., 女, 1935年生)

以下、この「42軒全て親戚」のような濃厚な集落を分野ごとにどのような人間関係で営まれていたかを証言から分析する。

4-1. 狩猟

集落での暮らしは、先行文献に詳しいが、ただ「マタギの里」という表現は正確とはいえない。まず三面の住民は自らを「マタギ」とは呼ばず、ヤマンド、ヤマウド（山人）と称する。さらに三面の住民全てが狩猟に携わったのでもない。

狩りはしね。(Z.K., 男, 1935年生)

あの猟なんつってもそのの、楽しみの猟でねんでよやっぱり必死に生きるための猟、現金収入なんてなんもねえ勤めるとこねんだもんだってね。いっくらでも、何百円でも何十円でも、現金収入得るために必死だったわけだから。せつない、生き方ですよ。そうそう、それ以外なにもないんです……現金収入得るために旅に出たの私はね、だから俺は、あの、あの猟とかそういうものはばかばかしいってね、ばかばかしい。(S.K., 男, 1937年生)

ほとんど、熊さ（笑）。楽しみだった。(S.I., 男, 1939年生)

あの三面で、狩りをやってきた人の話を私もこう人づてに聞いたり、それを取材して書いた本を読んだりするとね、いかにも狩りをしてそれを生活の糧にやったんだ、みたいな言い方してるけども、私に言わすとあんなん嘘だと思えますよ。あんなんあくまでも趣味でやるもんで、だから、じゃあ狩りをやった人たちが狩りをしない人と比べて経済的にどれほど豊かになったかという、そんな、まったくないですよそんなの。(K.I., 男, 1940年生)

狩猟が生活のためか趣味なのか矛盾した証言が出ているが、少なくとも昭和ヒトケタ世代は狩猟に行かない住民もいたことは確かである。おそらく大正から戦後にかけてさまざまな現金収入に従事できるようになって、狩猟に行く目的も生業としてではなく趣味へと変化したのではないだろうか。

狩猟の実態については先行文献で詳しく紹介されているので再論しない。狩猟に行くチーム編成は、12人を避けた人数としていた²⁰。今回の調査における知見として、狩猟に行くメンバーの組み合わせは、本家・分家といった血縁や隣近所という地縁で組むのではないとのことだった。15才以上で参加でき、その年齢や入り婿からの年数に応じ、仮の役割が決められ、経験に応じて重要な役に移っていったらしい。

山に入ってから、別に、初心者は初心者でこう、まだ2年目、ってだんだんこう経験していくから、別にそれは、誰であっても、その、階級で残っていくわけなんさ。(Y.K., 男, 1932年生)

いや、そんなみんなで、じゃ明日行くぞ、あさって行くぞって。(S.I., 男, 1939年生)

同好の士で声を掛け合って行ったのだという。また獲物は狩人だけでなく集落で分配することも多かったようだ。

主たる狩猟の対象は熊で、カモシカも獲っていたという。「カモシカは甘くて美味しかった」というような思い出話も聞かれた²¹。その他に個人的な狩猟でキジ、兎なども獲っていたとのことである。また熊の胆や毛皮は山形県小国町方面で現金収入となったらしい。

熊とかね、やっぱりおいしかったと思う。(Si.K., 女, 1965年生)

澤村：熊がお金になったのはいつごろまでですか？

S.I.：そうだね。やっぱりこっちに引っ越してくるころだね。まで。20年ぐらいだね、前。

澤村：じゃあそのあとは、獲ったら食べちゃうと。

S.I.：もう、皮なんかもう買う人いなくなった。熊の胆が金になってたけど。

²⁰ 12というのが山の神に係するタブーであるという。どうしても12人になるときは、連れて行く犬も人数に数えることでタブーを避けた由。

²¹ カモシカは1925年に禁猟に指定されたが、密漁が多く、1959年に一斉摘発を行なってようやく狩られなくなったという。参照、環境省「特定鳥獣保護管理計画作成のためのガイドライン（カモシカ編）」(<http://www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2b/index.html>, 2012年4月8日閲覧)。今回の証言者の中には1961年まで獲っていたという話と、1965年生まれで食べたという話もあり、摘発後も狩猟していたのかもしれない。

1980年の集団移転後においても、旧地周辺の山へ狩猟に行く人はいたとのことであるが、高齢化に伴い足は遠のいているようだ。

4-2. 旧三面での農業

旧三面での田地所有は、20軒弱であったという。集団移転で新三面へ移った31軒のうちでは17軒が旧地で田地を所有していたという²²。平均4反（約4,000㎡）であるが、山間地であるため収量は低かったという。

4反部、あったって、だから、年間を通してかそぐ多かったから食われねえ。食べられませんが。そんなもので。いっぱい作ってる人はね、こめの中でも、ほらこうわずか集落の中でも、ま、1町なんてのは多い方だよ、1町なんて、でもいくらもなんね、1町なんつったって20俵くれしかなんね、それしかとれねんだ。いま、そろそろ、いえからこっちくると、1反部からまあ10俵とれるって言うわけだから、だああの、奥三面の山、1反歩から2俵しかとれねんだもん。良いところはね。ううん。(S.K., 男, 1937年生)

米作だけでは生業とならないため、自家所有の畑地での畑作も行っていた。ただ畑地については、独立した畑地を所有していた家と、家敷地で畑作を行っていた家との違いがインタビュー調査では不明で、土地所有形態は判明しなかった。田畑の耕作については、お互いに助け合うこともあったが基本的には家単位で耕作を行っていたようだ。

前述のように、国有林を入会地として利用しており、そこでの焼き畑農業も行なわれていた。これは利用地を帯状に分割し、希望者でクジ引きをしてそれぞれ耕作していたとのことであった。

そこにあの、それこそ帯の幅なんて言ったんだけどもわずかずつだーっといってこういうふうにやってさ。そして、遠くになると、近くだばそこみんなが欲しがるけれども。遠くだとなかなか行ったり来たりも手間かかるし、容易でねえからね。そういうところには、何軒も行かぬけども、うちあたりは、そういう遠いところも、川向かいまでもやったもんだ。(Y.K., 男, 1932年生)

カノ刈って、そご葉っぱ乾いたら火をつけて焼いて、そしてそこに大根まいたり、小豆まいたり色んな事したもな。私もまねしてしてね。

最初のうちは、好きなどこしてったけども、だんだんだんだん増えてきたもんだから、

²² 民映研 [1996], p.9。

あの、畑も、ねえ、山の畑もね、こんな帯状にね、してね、くじ引いたり、そんなことしてね、あれだったけども、けっこうみんなやっぱり、カノ焼きだなんてね、草刈って、乾いたらそれを燃やして、そこをクワでけがえて、ああ大根だの、豆だの小豆だの好きなのまいたもんです。(K.H., 女, 1928年生)

俺来たごろ(注:1964年)がらあんまりしねぐなたんでねがなあ。(Z.K., 男, 1935年生)

焼き畑が行なわれなくなった理由は明確ではないが、化学肥料の導入による収量増と三面ダム完成による船通経由の物資流入によるものと思われる。

4-3. 旧三面での採集

山間の集落であることから、山菜やキノコの採集は盛んであった。特に1913年頃に新潟県三条市からゼンマイの買付商人が訪れたことを契機に、春のゼンマイ取りが熱心に行なわれていた²³。その時期には、一家総出で山中に泊まり込みに出かけるため、小中学校分校も10日から2週間ほど休校となった。中には家族だけでなく飼い犬と飼い猫まで連れて泊まり込んだということである²⁴。ゼンマイ採集は狩猟と異なり、一家単位で行動している。「ゼンマイ戦争」と呼ぶほどだったという民映研の映画のナレーションがある。

旧三面周辺の国有林に入会として入山して採集するのだが、各家ごとにフィールドを分け合い、競合することはなかったという。ただ何年か採集しなかったフィールドを他の家が利用する場合には一定のルールがあったとされている²⁵。

俺たちがあの一、小学校や中学校の頃は、ぜんまい休みって、特別学校休みがあったもんだ。長いころ20日くらい休みがあったんだねえかな。ま、学校の先生も休みのの方が良かったんでねえか(笑)。(K.I., 男, 1940年生)

学校の休み自体が2週間くらいだったんですかね。で一、まあうちら、っていうか子どもは学校があるんで。山奥行って、まあ2週間ぐらいたら下の部落帰ってきて、で、親たちはまた、それおいてまた1か月かそんぐらいは……で、まあ私、あんまり山得意じゃな

²³ 田口洋美 [2001] p.171。ただし小林存が1906年に訪れたときの記録では、既にこの明治39年に「ゼンマイの乾上がり100貫目50円」という現金収入が記載されている(他に、木材が第一位だが金額不安定、葛粉100円、ウレキ [不明だが、「村上では馬の尻被いにする」とある] 45円、砂金100円が1905年の売り上げだという、小林存 [1990], pp.47-48)。ちなみに当時の物価は、東京での米小売価格が10kgで約1円(2012年は4,690円)、金1gが1.35円(2012年は4,321円)である。

²⁴ 犬は野獣避け、猫は鼠避けであろう。

²⁵ 田口洋美 [2001] p.164。

かった、好きじゃなかった（笑）。（K.T., 男, 1964年生）

ゼンマイ以外の山菜類も採集はしていたようだが、ゼンマイ以外は自家消費用であったらしく、証言ではあまり言及されなかった。また秋の栗、キノコ類も重要な採集物であった。特にキノコの採れる場所を各家庭で秘密にし他人には教えないという話は各地で聞くが、三面も例外ではなかったようで、貴重なキノコの場所は親子でも教えなかったという²⁶。

4-4. 他集落との通交

椿宏治他 [1958] によれば、明治7年改正戸籍において、31軒中6軒7人が旧三面外からの入り嫁・入り婿であり、その半分は明治以前に婚姻しているという。今回の調査でも、インタビュー17人中、他集落からの嫁入りが3人、養女が一人（寺）、今風にいう「できちゃった婚」の入り婿が一人であった。

舟に乗ってお嫁なっていたもんだがら（笑）。ね、そしてあんだごな、ゆぎ降って、歩いて、部落まで歩いてきたよ、ねえ。（S.K. 妻）

したがって、少なくとも幕末以降にさかのぼって、全く孤絶した集落ではなく、周辺の集落との婚姻関係はあったといえる。他集落からの嫁入りは、先に嫁入りした先人の紹介という証言であった。この状況は小林存にも記載があり、当時の人口125人中、集落内結婚で生まれたのは男45、女37で、残る43名は集落外との婚姻で生まれたとされている²⁷。

他に日常的な通交としては、1節で説明したような新潟県内の三面川下流集落のヤドがあるのだが、全ての家がヤドを有しているのではなく、小国側と交流し、村上側へはほとんど行かなかったという証言もあった。

だから病気になったらね、新潟県側の、ま、一番近いの岩崩っていうの、わかりますか、あそこに出る人一人もいねんです。みんな山形の小国に出るんです。ってことはどういうことがという地形的に山形の方がおだやか、こっちが急で、いか、いげね。それからほんとにあの奥三面の集落は、新潟県であっても、山形の小国っていう人どの接点が多いんです。大昔からね、何百年、ね、あそこに、奥三面の人が住んでも、しょくぶん、食生活、すべて小国の人と似てます。新潟とのこっちの人とは似てません。（S.K., 男, 1937年生）

²⁶ 田口洋美 [2001] p.263。

²⁷ 小林存 [1990] p.50。

どうやら主として下流の、上述の岩崩集落等の新潟県村上市方面との交流が主であった家と、山形県小国町方面との交流が主であった家があるようだが、何によって違いが生じたのかは不明である²⁸。ちなみに宮島幹之介 [1896] では、著者の宮島は小国町側から入村して調査している。

5. 移転後の変化

移転によって大きく変わったのは生業である。上述のように旧三面で田地を有していた17軒のうち、三面でも田地を所有したのは15軒で、さらにそのうち自作しているのは2軒になったという²⁹。男性の場合、林業に従事した者もいるが、土木作業員やサラリーマンになる者が増えている。女性の場合、農業や山菜採りなどを止め、敷地内で自家栽培する程度の実事上の専業主婦になる者も多かったようだ³⁰。1960年代生まれの世代では、高校在学で村上市に出ている間に実家が新三面に移っており、高校卒業後に進学や就職して、旧三面での就業経験はほとんどない。

ソーシャル・キャピタルの変化という点で見ると、1940年代以前の生まれの世代と1960年代前後の生まれの世代で違いが出ている。古い世代は旧三面での「42軒全て親戚」のような濃厚な付き合いの継続が語られ、新三面地区外の住民とはほとんど付き合いがない、パーマ屋程度、という談もあった。一方、付き合いが薄くなったと感じるインタビューもいた。

うん、近くにいるもんだし、わだしも、あ、このようにパラパラ思ってることしゃべるもんだから、みんないい友達、いい友達に巡り合って、あの、ほんとにね、あの、幸せです。今ここへ来るとここへ来てみんなね、30軒みんなお友達だ。(K.H., 女, 1928年生)

こうぐるっと回ってここ30戸あるんですよ。へ、塀が邪魔してる。ってことは何故かっていうと、奥いた時はおんなじ職業、山仕事にもぜんまいとも一緒です。いまこっちくると、若い人いろんな職場かよってる行ってるでしょ。そうそう、こごよりも職を大事にしてるわけだから。もうこの区のなかの、輪っていうのはもうなくなりましたね。それこごちよっとおれあの、一つだけ、あれだけ、これぐるっと回ってみなさい。すごいですよ、そのとおりになんです人間性が、塀を見ればわかりますね。(S.K., 男, 1937年生)

一方、若い世代は、仕事などでの人間関係が地区外で作られ、新三面地区での近隣の付き合い

²⁸ 行政的には新潟県であるが戦中戦後の配給は山形県小国町からだったという証言もあった。

²⁹ 民映研 [1996], pp.9-10。

³⁰ 民映研 [1996], pp.10-11。

いは、通常の住宅地の町内会などと変わらない³¹。

（移転後は近所付き合い親せき付き合いが変化したかという問いに対して）やっぱり少し薄らいできたような感じがしますね。時代……。やっぱりあの、あのー、あのー、みんな、あの、歳がだんだん、やっぱりあのー、亡くなった方もいるのでやっぱり、うすーくなっちゃって。若い人たちになると、つきあいがなくなってきましたね。（Si.K., 女, 1965年生）

青年会や婦人会のようなアソシエーションは移転後に消滅したという。ただ三寿会と称する敬老会と、移築した鎮守社の祭は継続している。また正月には集落全員で集まって、「一統礼」という集会を開いているとのことだった。

一方、集落外との交流では、別の変化が語られた。ヤドとの交流は変わらないか増えたというし、また他集落から嫁入りした女性はその実家との交流が増えたという。交通の便が良くなったからである。一方、遠くなった小国との交流は変わらないか減ったという証言であった。

6. 移転についての感想

今回のインタビューでは、旧三面のことをどう思うかも尋ねている。多くは懐かしいと答え、春秋には山菜やキノコを採りに行くとのことであった。石川徹也は「雪がなくなる6月まではダムへの道も開通しない。山菜の季節は終わっており、三面の山菜は食べることはできない」と記述しているが³²、6月頃でも食べられる種類の山菜もあることから、山菜採りに行かなくなった人と行き続けている人がいるのであろう。平地でガラス窓が多い住宅での暮らしには馴染めなかったという声もあった。

いやー、来た時だばひどかったよ。ここにいればね、寒くていらんねえんよ。まーね、こんなね、ガラスにいと氷ん中にいる（笑）。うちであの、三面にいた時だば、みんなあの囲ってそれを火焚くと、火燃すともれなくて、あったかくていたんだけど、ここへ来てなんと寒くてね、とっもしんどかったよ、おら。つくりも違うし、なーんだ、どこ行ったってガラスだろ。いや、ほーんに笑い話だ、今になれば。食べるものはおいしくなかったんだね、あれは水おいしくなかったんだね。いやー、おいしくね。食べるもの慣れるまでは大変だったね。お米、うちから持ってきた米食べたってね、あの、味噌でもなんでも持ってきたの、おいしくなくて食べられないんよ。（Ha.K., 女, 1926年生）

³¹ 調査時にたまたま敬老会があり、終了後に若い世代がタクシーに相乗りで村上の街中へ飲みに繰り出すのを目撃したが、これは町内会自治会などでは珍しいことではなからう。

³² 石川徹也 [2011], p.137。

ただ、特に高齢者では今のほうが病院が近くて便利だという談話、懐かしいけれども年を取ったら雪下ろしなどは辛かっただろうから住み続けられなかったのではないか、という声もあった。また旧三面時代から、高校で村上に出て、そのまま集落外で就職する子弟が増えていたのが、新三面に移ったことで、そうした世代とも同居・近居するようになったことを歓迎する声もあった。

また石川徹也は新三面で2006年に聞いた住民の言葉として以下のように記している。

「松山（注、新三面）地区の30戸はいまだ、すべて残っている」「村上市でも中心街などは高齢化して子どもがほとんどいない地区もある。それに対して、松山だけでも小学生が十数人もいて、よその地区からは羨ましがられている。……山の集落だったときの記憶が、地区の連帯に大きな影響をおよぼしているのだろう。」³³

しかし続けて、若い世代が企業勤務になり、そちらでの人間関係を優先して地区の催しに積極的に参加しなくなったことを嘆いている。

おわりにー移転30年後のコミュニティ

三面集落は平均的な中山間地域集落とはいいがたい面もあるが、移転前後の聞き語り記録等と、集団移転から30年を経た今回の調査とによって、集落が集団で移転するという方途を選ばざるをえない場合へのインプリケーションがいくつか浮かび上がる。

まず、冒頭で記したようにコミュニティには地理的側面と人間関係的側面がある。そのうち地理的側面を変えてしまっても、人間関係が維持できれば、コミュニティの維持は可能である。もちろん、年齢構成等の変化による変容は押しとどめられないにせよ、という留保条件は付く。少なくとも三面では、30年、すなわち一世代は維持できている。

ただ、三面では「42軒全て親戚」のような濃厚なボンディング・タイプのソーシャル・キャピタルが存在した。そのことが集団での移転を選択し、その後もコミュニティを維持できたともいえる。そのようなソーシャル・キャピタルに対し、地域を越えたブリッジング・タイプのソーシャル・キャピタルはどうであったか。ヤドとの関係はこのタイプとは言いづらく、むしろ民映研のような参与観察者たちが三面の歴史民俗を映像で記録するために滞在したことが、ブリッジング・タイプのソーシャル・キャピタルになったと考えられる。今回の調査でも、民映研の映画について言及するインタビューイがいた。

次に、旧地を訪れられることの重要性である。山菜やキノコの収穫という実利もあるが、もはやダムに沈み旧村の風景は見られないにせよ、「故郷」との接続感は特に高齢者には意味があ

³³ 石川徹也 [2011], p.137.

ろう。今回の調査でも、懐かしさだけで見に行っているという証言もあった。また都会に住む孫などを山菜・キノコ取りに同行することで、教育になるだけでなく高齢者への敬意が芽生えるという³⁴。すなわち旧地での入会権などの慣行を利用し続けられることが求められる。居住地と利用地は地理的に一致しているのが中山間地域集落の常態であるが、それらが離れても通うことで耕作や採集を継続できる仕組みを作れば、移転しても喪失感を和らげることが可能である。ただし長期的には、濃密だったソーシャル・キャピタルがゆるやかに一般的なレベルに変化していく可能性も少なくない。

2011年の東日本大震災被災地では、喫緊の問題として移転するかどうかの選択を迫られている地区もあると聞く。また全国の中山間地域集落においても、集団移転という選択肢は常に念頭にある。ダム建設というファクターの違いはあるが、集団移転後も一世代30年間、コミュニティを維持し続けられた事例として、三面を見て良いだろう。

参考文献

- 石川徹也 [2011]『朝日連峰の自然と保護』緑風出版。
- 小池&伊藤 [2010]『山人の話 ダムで沈んだ村「三面」を語り継ぐ』はる書房。
- 小林存（曾我広見訳）[1990]『越後秘境探検記』新潟日報事業社。
- 澤村&杉原&北村&渡邊「集団移転から30年後のソーシャル・キャピタル－新潟県三面集落を事例に－」『新潟大学経済論集』93号，pp.239－252。
- 鈴木信之 [2011]「高根：世にも不思議な独立集落」澤村明&寺尾仁編著『山・人・村：新潟県中山間地域のソーシャル・キャピタル』日本学術振興科学研究費補助金「中山間地域のソーシャル・キャピタルの蓄積・革新の研究」（20604003）研究報告書（<http://hdl.handle.net/10191/17502>），pp. 79－80。
- 田口洋美 [2001]『越後三面山人記 マタギの自然観に習う』農文協人間選書（初刊1992年）。
- 椿宏治他 [1958]「越後の秘境三面」『民族学研究』22巻1～2号，pp.65－93。
- 椿宏治 [1968]「越後のマタギ」『民族学研究』32巻4号，pp.303－317。
- 宮島幹之介 [1896]「越後国三面村の土俗」『東京人類学会雑誌』11巻126号，pp.479－494。
- 宮本常一 [2011]『山に生きる人びと』河出文庫（初刊1964年）。
- 民族文化映像研究所 [1984]『越後奥三面－山に生かされた日々－』民族文化映像研究所。
- 民族文化映像研究所 [1996]『越後奥三面第二部 ふるさとは消えたか』民族文化映像研究所。

調査概略

インタビュー年月日

事前相談：2011年7月13日，同26日

インタビュー実施：2011年7月19日，同20日，12月12日

インタビュワー：澤村明，杉原名穂子，北村順生，渡邊登（および補助2名）

³⁴ 民映研 [1996] pp.12－13。

インタビュー一覧（生年順）

- H.K.女, 1926年生, 村上市下新保から嫁入
F.T., 女, 1928年生, 本家
K.H., 女, 1928年生, 小国町から養女, 寺
T.K., 女, 1930年生, 村上市大栗田から嫁入, 分家
Su.K., 女, 1932年生, 分家
H.K., 女, 1932年生, 分家
Ha.K., 女, 1926年生, Y.K.妻
Y.K., 男, 1932年生, 本家
Sa.K., 女, 1935年生, 村上市笹平から嫁入, 分家
Z.K., 男, 1935年生, 小国町出身で出来ちゃった婚, 分家
K.K., 男, 1937年生, 分家
S.K., 男, 1937年生, 分家
S.I., 男, 1939年生, 本家
K.I., 男, 1940年生, 不明
Y.I., 女, 1942年生, S.I.妻
K.T., 男, 1964年生, 本家
Si.K., 女, 1965年生, 本家
他1960年前後生まれ二人（区長, 副区長との事前相談）